国語科　「わかる・できる授業」 1

Ｈ２７．１０．２０

「読むこと」の領域では、教科書を読ませて、子どもから初発の感想を書かせ、それをもとに主人公の気持ちを考える展開が多いな。そして、意欲的に子どもに発表させ、それをまとめて、最後に感想等を書かせる授業を行っている。「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の領域では、教科書の指導案通りに進めている。

これが、「わかる・できる授業」ではないの？

このような指導では、「わかる・できる授業」につながりません。

では、国語科においては、どのようなことに気を付けて、授業改善に取り組めばよいのでしょうか。

まず、「話すこと・聞くこと」の領域を例に考えていきましょう。

「Ａ　話すこと・聞くこと」

「わかる・できる授業」にしたいが、児童生徒の学習に対する意欲の差が大きく、積極的に話す児童生徒とあまり話さない児童生徒に分かれてしまう。どうしたらいいのかな。・・・・

活発に話し合いを行い、「わかる・できる授業」になったと思っても、学習内容が身に付かないことが多いわ。さらに、他教科での話し合いにもつながらない。・・・

まず、学習指導要領の「話すこと・聞くこと」をじっくり読んでみましょう。すると、次のようなことが見えてきます。

○　指導事項は、**螺旋的**かつ**反復的**な指導を繰り返しながら、発達段階に応じ、「話す・聞く」能力を高めていく形態となっている。
○　児童生徒の**主体的な学習**になるように、「話題設定や取材に関する指導事項」が最初に書かれている。
○　「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」の順に指導事項が示されている。
○　小学校第５学年及び第６学年と中学校第１学年の指導事項には飛躍がなく、**滑らかな接続**が図られている。
○　**言語活動例**について、具体的に述べられている。
○　目標に示している**「話すこと・聞くことの態度」**を育成することにより、「話す能力」「聞く能力」「話し合う能力」が確実に身に付いていくような構造になっている。

まず、導入（めあて）の段階において、次のような点に留意することにより、「わかる・できる授業」に近づきます。

導入（めあて）でのポイント

○　児童生徒にとって、話す・聞く必要感や必然性が持てる題材を選ぶ。

- 日常生活と関連のある題材
- 実態を考慮し、興味関心のある題材
- 複数の中から、児童生徒が題材を選択

○　目的意識、相手意識を導入の段階で明確にする。

- 誰に、何のために話すのかを具体的に

○　学習の見通しを持たせる。

- 単元全体や本時の学習の見通し

○　めあての工夫

- 学習指導要領の指導事項とのつながりを明確化
- めあてはシンプルで具体的なもの

  例　「修学旅行は、列車とバスのどちらが便利か立場を明確にして話し合おう」

  「資料を引用して、運動の大切さを話し合おう」
- 児童生徒を引きつける提示の仕方を工夫（視覚化）

「話すこと・聞くこと」領域の指導は、活動に重きを置きすぎ、本来の「ねらい」を見失いやすいものです。そのため、授業の「ねらい」を十分に吟味することが重要です。

次回は、展開（活動）において、どのような点に留意することが重要であるかについて考えていきましょう。